

大妻さくらフェスティバル2022

3.26(土)



大妻中学校 3年 島崎きらい

主催: 大妻女子大学

後援: 千代田区、大妻コタカ記念会、大妻中学高等学校、千代田区内協力大学: 共立女子大学、城西大学、上智大学、
専修大学、東京家政学院大学、二松学舎大学、日本歯科大学、日本大学、法政大学、明治大学

協賛: 千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム

目次

巻頭あいさつ 2

千代田区長	樋口 高顕
大妻学院 理事長／大妻女子大学 学長	伊藤 正直
一般財団法人大妻コタカ記念会 会長	井上 小百合
大妻さくらフェスティバル実行委員長／ 大妻女子大学地域連携推進センター所長	小川 浩

「千代田のさくらまつり」に寄せて 5

共立女子大学／共立女子短期大学	学長 川久保 清
城西大学	学長 藤野 陽三
上智大学	学長 曄道 佳明
専修大学	学長 佐々木 重人
東京家政学院大学	学長 鷹野 景子
二松学舎大学	学長 江藤 茂博
日本歯科大学 生命歯学部	学長 沼部 幸博
日本大学	学長 加藤 直人
法政大学	総長 廣瀬 克哉
明治大学	学長 大六野 耕作

千代田学事業報告 11

共立女子大学	教授 田口 理恵
上智大学	教授 小塩 和人
専修大学	教授 岩尾 詠一郎
東京家政学院大学	准教授 加藤 理津子
日本歯科大学附属病院 総合診療科 2	准教授 小川 智久
法政大学 地域研究センター	センター長 松本 敦則

法政大学	教授 岩佐 明彦
明治大学	准教授 島田 剛
東京家政学院大学	教授 酒井 治子

地域連携プロジェクト報告 31

家政学部	教授 阿部 栄子
家政学部	教授 石井 雅幸
家政学部	准教授 石井 章仁
家政学部	常勤特任准教授 木村 かおる
社会情報学部	教授 細谷 夏実
社会情報学部	教授 炭谷 晃男
人間関係学部	准教授 堀 洋元
人間関係学部	准教授 八城 薫
短期大学部	教授 堀口 美恵子
短期大学部	准教授 富永 暁子

大妻さくらフェスティバル俳句大賞 42

理事長・学長賞受賞作品
優秀賞受賞作品

イベント団体紹介 45

千代田区立九段小学校 九段囃子の会
大妻嵐山中学校高等学校 ダンス部

「大妻さくらフェスティバル2022」体験コーナー	1
地域貢献プロジェクト一覧	30
大妻古本募金	46
図書館員オススメ書籍紹介	47
大妻女子大学博物館	48
生涯学習のご案内	49

「大妻さくらフェスティバル2022」 体験コーナー～草木染めのコサージュ作り～

大妻女子大学短期大学部 家政科 食物栄養専攻
堀口 美恵子

植物染料で染めたフェルトを使って、簡単なコサージュを作ってみましょう。今回は、「くちなしの実」で染めた黄色のフェルト、及び、「みかんの皮」に銅の媒染剤を加えて染めた黄緑色のフェルトを使って小さなコサージュを作り、マグネットに付けてみました（右の写真）。

下記 URL の動画では、「くちなしの実」による染色方法をご紹介した後、8つのステップでコサージュ作りを説明しています。市販のカラフルなフェルトを使っても、同様に可愛いコサージュを作ることができますので、ぜひ、挑戦してみてください。

また、今までに作った染色作品（卒業生の制作も含む）や、対面で実施した「大妻さくらフェスティバル 2019」の体験コーナーもご紹介しています。今後、エコで癒しのクラフト作りを通じて皆様方とお会いできる日を楽しみにしております。



大妻さくらフェスティバル



草木染めのコサージュ作り

大妻女子大学短期大学部家政科食物栄養専攻
栄養学研究室 堀口美恵子



<https://youtu.be/6k01zyMvdKI>



千代田のさくらまつり 「大妻さくらフェスティバル2022」

千代田区長
樋口 高顕

桜の便りとともに、春の息吹を感じられる季節となりました。その季節に合わせて「大妻さくらフェスティバル 2022」が開催されますことを、心からうれしく感じております。

本フェスティバルが、新型コロナウイルス感染症の影響で疲弊した私たちの気持ちを、大いに盛り上げてくれるものと期待しております。

例年、本フェスティバルと連携して実施しております「千代田のさくらまつり」は、残念ながら、今年も新型コロナウイルス感染症の影響により、開催を見送ることとなりました。しかし、千鳥ヶ淵緑道は通常どおり通行できるほか、ボート場も日中のみ営業をいたしております。

また、桜の開花の様子をYouTubeでライブ配信しておりますので、皇居のお濠である千鳥ヶ淵の土手や緑道に咲く桜を充分お楽しみいただけるものと考えております。

私は、この「さくらまつり」の想いも込めて、創意工夫を凝らして開催される本フェスティバルを心から応援させていただきます。

さて、千代田区では、区内の大学などにお願ひし、当区の施策に関わる調査・研究を「千代田学」と称して実施しており、今年で19年目を迎え、定着してまいりました。

大妻女子大学には、区の花「さくら」を題材に、さまざまな研究のご報告をいただくとともに、地域の方々との連携により、関連事業を実施されておりますことに、敬意を表する次第であります。

千代田区には、10万人を超える学生が活動され、大妻女子大学の皆さまも、地域の幅広い活動に積極的にご参加いただき、地域との交流を深め、地域の大学として親しまれております。

今後とも、千代田区との連携を深めていただきますとともに、大妻女子大学の発展を心よりご祈念申し上げます。



「千代田のさくらまつり」と 「大妻さくらフェスティバル」

大妻学院 理事長
大妻女子大学 学長
伊藤 正直

千鳥ヶ淵の桜開花にあわせた「千代田のさくらまつり」が開催される時候となりました。世界的なオミクロン株の大流行など、2022年に入ってもコロナ禍の収束が見通せないこともあって、「千代田のさくらまつり」の一環としての「大妻さくらフェスティバル」は、本年度も非対面方式で実施することといたしました。「大妻さくらフェスティバル」を楽しみにしておられた皆さまにはご不便をおかけしますが、よろしくお願い申し上げます。

恒例の小学生の部、中高生の部、一般の部と分かれて募集する「俳句大賞」、区内大学・専門学校の連携事業としての「千代田学」の研究・活動報告、大妻女子大学「地域連携プロジェクト」の報告などをパンフレットに掲載します。また、これまで大妻アトリウムで開催してきた小学生から社会人までの参加による各種の発表会やイベントなどについても、昨年度と同様、動画配信いたします。

千代田区は、東京の中心部を占め、皇居外濠のほぼ内側をその区域としています。国会議事堂やほとんどの官庁がある政治の中核地域であるだけでなく、大手企業の本社、経団連などの経済組織が立地するオフィス街でもあり、さらには多くの大学や文化施設が集中する文教区域でもあります。こうした優れた都市環境のなかで、本学院も、新しい都市文化の担い手として、その一端を担うべく努力する所存です。

近隣5大学により、2018年度に発足した「千代田区キャンパスコンソ」では、学生間の単位互換をはじめとして、さまざまな企画を共同で行い、教育・研究の相互発展、研修なども企図してきております。千代田区内の企業や教育機関との協定も継続しております。これを機にさらに地域文化の発展に寄与できるよう微力を尽くす所存です。今後ともよろしくお願い申し上げます。



「大妻さくらフェスティバル2022」を祝して

一般財団法人大妻コタカ記念会 会長
井上 小百合

桜の開花に合わせて「大妻さくらフェスティバル」の開催をお慶び申し上げます。

昨年に続き非対面形式での開催になりましたが、今年は大妻コタカ記念会の生涯学習講習会の様子をご紹介いただく機会を得て大変うれしく思っています。従来から会員だけではなく千代田区在住の皆さまをはじめとして広く一般の方にも多くご参加いただいておりますが、これを機に多くの方に関心を寄せていただければ幸いです。

大妻コタカ記念会は大妻女子大学、大妻高等学校、大妻多摩高等学校の卒業生および在学する大学生、高校生によって構成される一般財団法人です。大妻コタカの偉業を継承具現することを目的の一つに掲げ、同窓会事業はもとより、一般財団法人として広く一般の公益に資する事業を積極的に進めております。今回紹介しております生涯学習講習会のほか文化講演会も開催しておりますので、多くの方にご参加いただけるようお待ちしております。

※生涯学習講習会については P.49 をご覧ください。



大妻さくらフェスティバルに寄せて

大妻さくらフェスティバル実行委員長
大妻女子大学地域連携推進センター 所長
小川 浩

例年、大妻さくらフェスティバルの日程は、桜の満開よりも少し早く設定されているのですが、それでも千鳥ヶ淵には桜を求めて人々が集い、咲き始めた桜の下で肩を寄せて写真を撮っていた光景が、今では懐かしく思い出されます。本来、「今年の開花のペースはどうだろう」と気にし始める頃なのですが、「3月末には感染者数はどうなるだろう」と考えなければならぬことを残念に思います。

そのような状況のため、本年度も、学生や保護者の皆さま、地域の皆さまの健康と安全を第一と考え、大妻さくらフェスティバルは学内イベントを実施せず、「俳句大賞」を中心に、パンフレットを通して本学の地域連携活動をご紹介させていただくことにいたしました。来年度こそ大学にお越しいただき、地域連携活動の発表やミニ体験などを楽しんでいただけることを願っております。

今後も大妻女子大学は、地域連携推進センターを通して地域の方々と連携し、地域の活性化に貢献できるように努めてまいりますので、よろしく願いいたします。

「千代田のさくらまつり」 に寄せて

大妻女子大学と区内10大学は相互に連携・協力して、それぞれが有する知的資産を地域に還元することで千代田区を維持し、発展させ、次世代に引き継いでいくことを目的に、「千代田区内大学と千代田区の連携協力に関する基本協定」を締結しています。区内10大学からお祝いの言葉を寄せていただきました。



岩波ホール閉館の知らせを聞いて

共立女子大学／共立女子短期大学 学長
川久保 清

2年連続コロナ禍の状況で「さくらまつり」の原稿を書くことになりました。昨年末には感染者数の減少が顕著で、このまま収束するのではと思わせる状況でしたが、年を明けて、再び昨年の夏に匹敵する罹患者数となっています。

経済活動を止めないとよく言われますが、文化活動が停滞するのは残念です。神保町界隈の種々のお祭りは2年連続で中止となり、神保町の岩波ホールが7月に閉館すると報道されました。映画観客数の減少だけでなく、映画製作も減少している影響があると思います。朝日新聞2月22日夕刊には岩波ホール支配人岩波律子さんのコロナ禍を生きる言葉として「体に食べ物が必要なように、心には文化が必要です。」が紹介されていました。岩波ホールは、令和2年のコロナによる休館から改修工事が始まり、令和3年2月6日に再開されたばかりでした。教育活動を含め文化活動を止めないという姿勢を可能な限り持ちたいものです。



サクラ満開の千鳥ヶ淵を描いてみました!

城西大学 学長
藤野 陽三

昨年、初めて「千代田のさくらまつり」に言葉を寄せる機会をいただき、大妻女子大学のすぐそばの千鳥ヶ淵に触れ、私が描いた下手な絵を載せていただきました。千鳥ヶ淵といえば都内有数の桜の名所。3月末のサクラ満開の時の千鳥ヶ淵を描いてみました。私の専門は橋なので、首都高速の橋も遠くにいれてあります。昨年からのお約束を果たせ、とてもうれしい気分です。いまだ感染症の影響は大きいですが、新型コロナウイルス感染症が収まり、人々の笑顔もさくら色となるよう願っています。





時の移ろいの節目として

上智大学 学長
曄道 佳明

時間とは、人類が社会を構成する上で必要不可欠な概念であると思います。時の経過の中で、私たちは日々を感じ、将来を計画し、人生を全うします。特に我が国において、私たちの生活に節目を与える時の移ろいの代表的単位は、“季節”であろうかと思います。おそらく、それは人間の本質的な生命活動の営みに重要であるだけでなく、春夏秋冬という彩の変化によって、私たちの生活にリズムを刻む役割を果たしているからでしょう。とりわけ春の到来は、物事の始まりや息吹を感じさせ、社会のポテンシャルを高める効果を生み出します。私たちは桜の開花を、社会のリセット、リスタートの合図として心待ちにしているのではないのでしょうか。

今年も「千代田のさくらまつり」を祝う時期となりました。ご準備にあられた皆さまに心より感謝申し上げます。そして、コロナ禍に翻弄される私たちの日々が、このさくらまつりによって癒され、回復への大いなる希望を生み出すものと確信いたします。



国際色豊かな学び場へ

専修大学 学長
佐々木 重人

新たな変異株の発生等に伴い、未だ世界中がコロナ禍に見舞われている最中ではありますが、今年も「大妻さくらフェスティバル」が開催されることは、心も華やぎ、誠にうれしく存じます。さまざまな工夫を凝らし、前回に続き非対面方式で開催されることに敬意を表するとともに、心よりお祝い申し上げます。

専修大学が千代田（神田キャンパス）に既存の法学部、生田キャンパスから移設された商学部、そして2020年に新設された国際コミュニケーション学部の3学部を集結させて、間もなく丸2年になります。この3学部のコラボレーションにより、国際色豊かな新しい学びの場を千代田に創出するとともに、本学がより深くこの地に根差し、地域社会の課題解決や発展に貢献していくという決意を新たにしております。

大妻女子大学が本企画を通じてリーダーシップを発揮されていることにエールを送るとともに、これを契機として千代田区にある各大学の魅力を共に発信していきたいと存じます。



「さくら」への思い

東京家政学院大学 学長
鷹野 景子

日本人である私の心に、桜がいかに根付いているかを知ったのは、30代半ばに10ヶ月間の米国留学から帰国した年のことです。毎年目にしてきた桜が、その年はとりわけ心に染みしました。日本に帰ってきたことを実感したひと時でした。それ以来、毎年桜の季節になる度に、帰国直後に満開の桜の前で撮った幼き娘との写真が脳裏に蘇ります。

千鳥ヶ淵の桜も友人のことを思い出させてくれます。大学時代の同級生が千鳥ヶ淵の桜の大ファンで、毎年楽しみに訪れていました。

2021年4月に東京家政学院大学の学長に就任いたしました。そして、千代田区の花が「さくら」であることをこの度知りました。千鳥ヶ淵を中心に素晴らしい桜の花が私たちを楽しませてくれますので、大いに納得いたしました。

「大妻さくらフェスティバル」の継続的な開催に敬意を表しますとともに、千代田区内の大学との連携がますます活発になりますことを期待しております。



千代田のさくらに心を寄せて

二松学舎大学 学長
江藤 茂博

本年度も、厳しい社会環境の中ですが、「千代田さくらまつり」そして「大妻さくらフェスティバル」の開催、お喜び申し上げます。まだ桜のつぼみさえも感じられない季節に、このペンを私は取っているのですが、2つの「さくら」の文字に誘われて、二松学舎から堀端を眺めおろしますと、記憶の中の満開の桜と重なり、咲きほこった桜がそこに見えているような気がします。学問教育の府でもある千代田区は、ここに学んだ若者たちが、もっと大人となり、やがて仲間とあるいは家族を成して、この桜の季節に再び集う場所となる。それが私ども学校関係者にとつての「千代田さくらまつり」なのです。コロナ禍の中でのイベント開催に苦慮するしかない現状ですが、非対面方式で開催されるという「大妻さくらまつり」の皆で力を合わせたご努力も、やがて懐かしい記憶となることでしょう。いまはまだ、満開の桜を楽しみたいと思います。



大学 ism の危機

日本歯科大学 生命歯学部長

沼部 幸博

この度は長引くコロナ禍にも負けず「千代田のさくらまつり」の一環として「大妻さくらフェスティバル」を非対面方式といえども盛大に開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

約2年に及ぶ新型コロナウイルスの脅威は、教育機関に多大な影響を与え続け、コロナ禍前と比較して明らかに大学のアクティビティが低下しています。その中で本学に広がりつつある問題の一つが「大学 ism の変化」です。

さまざまな学生の年中行事、クラブ活動、学外活動等のほとんどが中断され、それに伴い本来苦楽を共にしながら連綿と引き継がれてきたはずの学年を跨いだ学生間の共通意識、さらに大学の精神（本学らしさ）が失われて行く危機を感じます。

コロナ禍収束後、これらの検証と復元が次の大切な仕事であり、またこれは、これまで断ち切れなかった悪しき慣習を修正する好機となるかも知れません。

いずれにしても、学生たちと「膝をつき合わせて」会話ができるその時が待ち遠しいです。



「千代田のさくらまつりに寄せて」

日本大学 学長

加藤 直人

千代田区に桜が咲き春の訪れを感じる時期に今年も「千代田のさくらまつり」の一環である「大妻さくらフェスティバル」が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

いまだ衰えない新型コロナウイルス感染症は現在も社会のあり方を変化させております。その中で、地域の活性化と地域文化の内外への発信を目的としたイベントを開催されるなど、常日頃から千代田区の地域連携に大きくご貢献されている大妻女子大学の関係の皆さま方に心から敬意を表するとともに、深く感謝申し上げます。

本学は千代田区内に5つの学部等を設けており多くの学生たちが在籍しておりますが、残念ながら本年度も対面授業が制限され多くのイベントも中止となりました。一日でも早く、あの千鳥ヶ淵に咲き誇る桜を横目に多くの学生たちが九段坂を歩き賑わう日が戻ってくることを切に願っております。

結びに、千代田区および各大学のますますのご発展を祈念するとともに「大妻さくらフェスティバル」のご成功を念じ、ご挨拶とさせていただきます。



千代田のさくらまつりによせて

法政大学 総長
廣瀬 克哉

千代田に学舎を持つ学校にとって、桜はいつも学年の切り替えとともにあります。満開の桜に迎えられ、送り出される学年。葉桜に迎えられ、桜の蕾に送り出される学年。年によって微妙に時期はゆらぎますが、いずれにしても桜花は学校の節目に、ここにあります。

コロナ禍のさなかでも毎年桜は花を開き、その下で繰り広げられる人の営みが例年と異なっている、春の一瞬にしか見られない、いつもの風景を見せてくれます。先行きが見えない中での準備のご苦労は多いことと存じますが、毎年行われるさくらまつりは、どんな状況下でも変わらぬものの存在を実感させてくれる場であり、今年もそれが行われることに安堵の気持ちをいだかせてくれます。開催を心よりお慶び申し上げ、準備の労を執られた皆さまに感謝いたします。



生きた学びの場としての 地域連携を目指して

明治大学 学長
大六野 耕作

千鳥ヶ淵の桜が本格的な春の訪れを実感させてくれる頃、「千代田のさくらまつり」の一環として「大妻さくらフェスティバル」が今年も開催されますこと、心よりお慶び申し上げます。

千代田区と区内の大学が行う調査・研究事業である「千代田学」を通じた各大学の取組みは、大学の魅力・特色をより多くの区民の皆さまに知ってもらうことができる貴重な機会であるとともに、地域と学生との交流の場の創出にもつながっています。コーヒーを軸に「神保町の街づくり」と「SDGs」(持続可能な開発目標)に取り組んでいる明治大学の「神保町コーヒープロジェクト」はその好例です。

地域の方々のサポートを受けながら、実社会の中で自ら課題設定をし、共に考え、解決策を共に創り出していくことは、学生を大きく成長させます。これからも千代田区を舞台に、大学を超えた学生同士のネットワークが深化し融合することで、地域社会の課題を解決するイノベーションが生み出されることを期待しています。

千代田学事業報告

千代田学とは、区内の大学が、千代田区に関する様々な事象を一つの学問として学ぶもので、平成16年度から始まりました。千代田区は、審査のうえ、その調査・研究に対し経費の一部を助成しています。

千代田区版「人生会議」 普及・啓発プログラムの展開と評価

研究代表者：共立女子大学 看護学部 地域在宅看護学領域 教授 田口 理恵

1. 研究の背景と目的

人生の最期までその人らしく過ごすため、人生の最終段階に望む治療・ケア・生活について、本人と家族など大切な人と話し合い共有するプロセスである、アドバンス・ケア・プランニング（ACP）の重要性が謳われている。厚生労働省では、その愛称を「人生会議」と定め、普及・啓発を推進している。しかしながら、健康なうちから取り組む人生会議への取組みはいまだ低迷している。

我々が、令和2年度千代田学において、千代田区の住民・地域特性の分析を行った結果、千代田区住民では、全国調査と比べて、人生の最終段階における医療・療養について家族と話し合っている割合が低く、一方最近5年間に身近な人の死を経験した者のうち、その死に対して心残りがある割合は顕著に高いことが明らかになった。その背景として、千代田区では高度急性期、急性期病床が多いことから、医療職と早期から継続的なコミュニケーションが取りづらいことに加えて、家族と離れて暮らす人、家族と疎遠な人が多いことがあげられ、話し合いのきっかけづくりに焦点化したプログラム開発の必要性が示唆された。

そこで本研究では、健康なうちから行う人生会議を動機付け、話し合いのきっかけとなる普及・啓発プログラム開発を行い、実施、評価を行うことを目的とした。

2. 人生会議トランプの開発

健康なうちから行う人生会議のきっかけづくりとして、家族で楽しめるゲーム形式の媒体として、人生会議トランプの開発を行った。人生会議トランプとは、トランプカード1枚1枚に、人生会議のきっかけとなるお題や、お題に関するひと言メモを記載したもので、神経衰弱やババ抜きルールに話し合いの要素を付加するものである（図1）。

人生会議トランプのお題やひと言メモのコンテンツ検討に当たっては、千代田区住民と保健医療福祉職者を対象としたWEB調査を実施し、家族と話し合っていること、家族に聞いておきたいこと、専門職の立場から話し合っておいて欲しいこと、などの意見を収集し、コンテンツの抽出を行った。



図1 人生会議トランプ



図2 人生会議トランプ検討ワークショップ（2021年12月18日（土）、於：共立女子大学）

また、千代田区社会福祉協議会職員、九段坂病院職員（IKILUを考える会メンバー）と共立女子大学看護学部の学生、教員の計14名が参加したワークショップを開催して（図2）、検討を行った。

3. 人生会議普及・啓発イベント

WEB調査において高い関心が示された、「終末期医療」「認知症」「お金」をテーマとした講話と、人生会議トランプの体験会を組み合わせ、人生会議普及・啓発イベントを、2022年1月22日（土）にオンライン開催し、千代田区住民、在学者（大学生）、在勤者、計40名程度の参加を得た。今後は、参加者からの評価をもとに人生会議トランプを改善し、家族にとどまらず、高齢者サロンなどでも遊びやすいものにし、普及・啓発活動に活用していくことを計画している。

参加要約

人生会議の始め方

～ウィズコロナの時代に、元気なうちから家族と話しておきたいこと～

【人生会議】とは、人生の最終の時期の過ごし方、医療・ケアの希望、ついでに大切なことなどについて、家族と話し合っておきたいこと。これにより、死の迎え方や葬儀の希望など、自分から話しておきたいこと、考えがまとまるとともに、家族の希望や不安も把握し、話し合える。人生会議は、家族の希望や不安を話し合える。話し合えることで、家族の希望や不安が解消され、話し合えるようになります。

以下、議定したトランプを基に、資料、動画から人生会議を学びます。

第1部 元気なうちから話しておこう！：医療編
 IKILUを考える会、九段坂病院、地域医療連携協議会、高瀬口女子
 元気なうちから話しておこう！：認知症編
 共立女子大学看護学部、学務課（老年学講座）、日本認知症ケア学会代表員 北川公子
 元気なうちから話しておこう！：お金編
 千代田区社会福祉協議会、ちよだて老年福祉センター職員

第2部 家族と気軽に遊べる「人生会議トランプ」のご紹介・体験
 共立女子大学看護学部、教員（地域医療連携学） 田中恵

日時 2022年1月22日（土） 14：00～15：30

会場 オンライン開催（Zoom）

定員 40名（先着順） 対象：千代田区住民、学生、社会の方

お申込み方法はこちらへ 共催：共立女子大学看護学部、IKILUを考える会、千代田区社会福祉協議会

図3 人生会議普及・啓発イベント

千代田区に埋もれた戦後のアメリカ生活を発掘する： パレスハイツ、ジェファソンハイツ、 リンカーンセンターを事例にして

研究代表者：上智大学 外国語学部 教授 小塩 和人

1. 本事業の目的

本事業が持つ第一の目的は、千代田区に位置する上智大学で北米研究を専攻する学生たちが、地元を向け「忘れ去られた日米関係」について「過去を発掘する」経験をすることで、自らが通う大学と地域をより身近なものとして捉え直す契機をつくることである。さらに第二の目的として、大学生が発掘した歴史を地域の人々に披瀝することで、大学と地域との結びつきを深める契機をつくることである。

2. 本事業の対象

学生が発掘するのは、今から 75 年前に建てられた住宅地区である。第二次大戦後の千代田区には、隼町に「パレスハイツ」(図1) 永田町に「ジェファソンハイツ」(図2) 霞ヶ関に「リンカーンセンター」(図3) と呼ばれる住宅地区があった。しかし、今では跡形もなく、人々の記憶からも消え去って久しい。それもそのはずで、現在はそれぞれ国立劇場、衆議院議長と参議院議長の公邸、国土交通省第3合同庁舎が建っており、戦後日本を占領した在日米軍が接収して、二百数十に及ぶ宿舍群を建設したことは、忘却の彼方に霞んでいる。



<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10756455/14>

図1 パレスハイツ



United States. Armed Forces Pacific. Office of the Chief Engineer, Dependents Housing: Japan & Korea (Tokyo: Gijutsu Shiryo Kankokai, 1948) , p.22

図2 ジェファソンハイツ

3. 本事業の実施内容

戦後日本を占領した在日米軍の軍人軍属およびその家族が居住する目的で建築された「米軍住宅」は、我が国では「米軍ハウス」、「外人住宅」などとも呼ぶが、アメリカ合衆国では Dependent(s) House すなわち「扶養家族住宅」と呼んでいる。こうした生活空間に接した戦後日本人は、圧倒的なアメリカ生活文化に影響を受け、高度経済成長へと疾走していくのである。その実像を文献・映像資料から歴史的に再構成していく作業を行い、2021年10月30日に南山大学で行われた研究交流会で発表し、翌年3～5月まで上智大学図書館・6号館で歴史展示を行っている。



<https://uofmd.maps.arcgis.com/apps/MapJournal/index.html?appid=6eb9077e3025434dab81b0eadbf4ca29>

図3 リンカーンセンター

千代田区における食料品と生活必需品の備蓄のあり方について

～各家庭での食料品と生活必需品の備蓄実態を考慮して～

研究代表者：専修大学 商学部 教授 岩尾 詠一郎

1. はじめに

今後想定されている首都直下型地震に備えるためにも、食料品等の備蓄は、必要不可欠であると考えられる。この食料品等を含めた災害時に必要な物資の備蓄は、地域防災計画であり方が示されている。しかしながら、災害発生時には、食料品等を備蓄している施設が被災することも想定される。この場合、備蓄量が想定よりも少なくなることが想定される。すなわち、自治体での備蓄量が十分であったとしても、備蓄している施設が被災すれば、被災者への食料品等の適切な供給が難しくなる場合がある。これらの課題解決のための方法の一つとして、家庭での食料品等の備蓄が考えられる。

そこで、本事業では、災害発生時に必要な食料品等の物資の自治体と家庭での備蓄のあり方を明らかにする。

2. 本研究の方法

本事業の目的を達成するために、①首都圏の各自治体がホームページで公開している地域防災計画から、備蓄している食料品の品目、数量および備蓄場所のデータと、各自治体の人口や人口密度等のデータを収集し、これらのデータから、食料品の備蓄の特徴を示す。次に、②自治体を対象に、ヒアリング調査を実施し、備蓄が推奨される食料品の種類とその数量、および備蓄場所のあり方を明らかにする。そして、文献調査から、③家庭での食料品等の物資の備蓄すべき品目や数量を明示し、家庭で備蓄すべき食料品等の品目や数量を明らかにする。その後、④家庭での食料品等の備蓄実態のアンケート調査を実施し、家庭での食料品等の物資の備蓄のあり方を示す。最後に、⑤これら検討結果から、災害発生時に必要な食料品等の自治体と家庭での備蓄のあり方を、自助と公助の観点から明らかにする。

本稿では、このうち、①首都圏の自治体の食料品の備蓄の特徴と、②首都圏の自治体へのヒアリング調査の結果を示す。

3. 首都圏の自治体の食料品の備蓄の特徴

首都圏の自治体の食料品の備蓄の特徴では、首都圏の各自治体がホームページで公開している地域防災計画において、備蓄している米類等の食料品（以下、食料品等）の数量が示されていた自治体を対象に、自治体の夜間人口、人口密度、高齢化率のデータと食料品等の備蓄数量の散布図を作成し、首都圏の自治体の食料品等の特徴を示す。このとき、分析対象から東京都特別区と首都圏の政令指定都市を除いた。なお、分析対象自治体数は、47自治体である。

本稿では、各自治体の食料品等の備蓄量と夜間人口の関係と、首都圏の自治体別の夜間人口1人当たりの食料品等備蓄量の集計結果を述べる。

その結果、各自治体の食料品等の備蓄量と夜間人口には、概ね相関関係が見られた（図1）。次に、

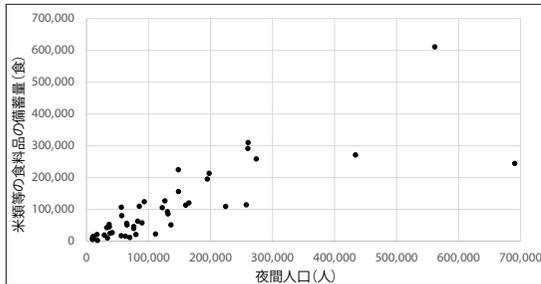


図1 首都圏の自治体別の米類の備蓄量と夜間人口の関係図

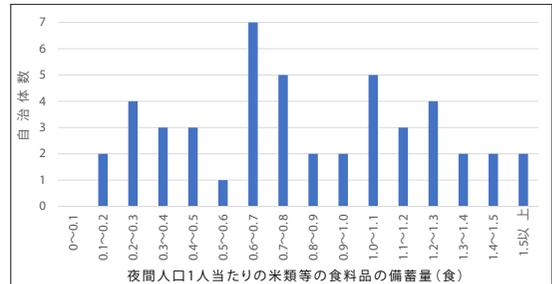


図2 首都圏の自治体別の夜間人口1人当たりの米類の備蓄量

夜間人口1人当たりの食料品等の備蓄量は、夜間人口当たり0.6～0.7食分を備蓄している自治体が最も多く、全体の14.9%を占めていた。次に多いのは、0.7～0.8および1.0～1.1食分で、全体の約10.6%を占めていた。最も備蓄日数が多い自治体では、約1.9食分を備蓄していた。なお、夜間人口1人当たりで見ると、29自治体（全体の約61.7%）で、1人1食分未満の備蓄量であることが明らかとなった（図2）。

4. 首都圏の自治体の備蓄物資の備蓄実態のヒアリング調査

首都圏の自治体のうち6自治体を対象に、自治体の備蓄物資の備蓄実態のヒアリング調査を実施した。本稿では、ヒアリング調査の結果のうち、①避難所の割り当て、②備蓄している食料品の種類の結果を述べる。

ヒアリング調査の結果、①避難所の割り当ては、町会・自治会単位で割り当てていた自治体が2つ、地域ごとの割り当てが無かった自治体が3つあった。なお、地域ごとの割り当てが無いと回答した自治体のうち、新型コロナウイルス感染症の拡大により、避難所の収容人数を大幅に削減する必要が生じたことも、割り当てがない要因と回答している自治体もあった。

②備蓄している食料品の種類は、水を使わないもの、お湯を使わないもの等、すぐに食べるものを備蓄している自治体、必要最低限の種類にとどめている自治体、高齢者に配慮した物資を備蓄している自治体があった。さらに、新型コロナウイルス感染症の拡大により、個食できる物資も備蓄する自治体もあった（表1）。

以上のことから、自治体によって、備蓄する食料品等の種類の考え方が異なっていることが明らかになった。

表1 首都圏の自治体の備蓄物資の備蓄実態のヒアリング調査結果

	A自治体	B自治体	C自治体	D自治体	E自治体	F自治体
避難所の割り当て	町会・自治会単位で割り当て	地域ごとの割り当て無し	地域ごとの割り当て無し	町会・自治会単位で割り当て	—	地域ごとの割り当て無し
備蓄している食料品の特徴	白米と缶詰	すぐ食べられる。個食できる。	お湯を使わない。	水を使わない。重くない。	高齢者に配慮した食料品も備蓄。	必要最低限の種類の備蓄

千代田区における和食文化・芸術の体験プログラム開発に関する研究

研究代表者：東京家政学院大学 人間栄養学部 准教授 加藤 理津子

1. 研究の背景と目的

千代田区は政治、経済において先進的であると同時に、江戸時代からの文化資源を擁するなど多面性も持つ地域であり、食の面においても和食文化を支える老舗が多い。本学では令和元年度、令和2年度の「千代田学」事業において「千代田区和食文化体験プラットフォーム」の開発および活用をすすめ、成果物としてホームページ「たべちヨダ (<https://tabechiyoda.com/>)」を立ち上げた。千代田区内の地域資源を活用した本事業は、親子のふれあいの機会、和食体験の場を提供しただけでなく、千代田区に通学していながら地域を知る機会のなかった学生にとっても、管理栄養士として必要な素養である地域の住民への理解、社会資源を探索して発信する力を養う機会となった。

一方、現在、政府が新型コロナウイルス感染症予防のための「新しい生活様式」を推奨した結果、人々の勤務形態や食の消費行動が変化しており、特に居住空間や居住地域での滞在時間の延長やテイクアウト、デリバリーといった中食利用率の上昇は今後も起こると考えられる。そこで、和食文化体験の拠点を記した「たべちヨダ」を地域資源の循環に活用することを目指し、「たべちヨダ」に掲載した店舗と本学学生と共同して新商品の開発を行った。また新商品を使って中学生に食レポ記事と商品デザインの作成を体験する機会を提供した。

2. 活動内容

(1) 「千代田区和食文化体験プラットフォーム（たべちヨダ）」の発展・活用

人間栄養学科4年生6名が3チームに分かれ、それぞれ地域店舗へ客層や新商品への要望、学生による新商品開発への期待などについてインタビューを行い、その内容をもとに新商品の開発を行った。店舗と新商品は以下の通りである。

表1 協力店舗と新商品

店舗名	新商品
レストラン 1899 御茶ノ水 (千代田区神田駿河台 3-4)	六煎茶セット
神田淡平 (千代田区内神田 2-13-1)	江戸味噌せんべい
天野屋 (千代田区外神田 2-18-15)	
宝来屋 (千代田区九段南 2-4-15)	うぐいすあんのほうじ茶どら焼き

(2) 「たべちヨダ」の活用×中学生の和食文化体験プログラム

学生が和食文化を発信する地域店舗と共同で開発した商品を通し、食べることを楽しむ心を育む、和食文化やモノづくりへの興味関心を高める、表現力などの感性を育むことを目的に、中学生を対象とした体験プログラムを開催した。各商品を開発した学生が商品開発の過程および商品について説明したあと、生徒は商品を自宅で試食し（感染症対策のため）、食レポ記事およびデザイン画を記入したワークシートを後日提出した。

食レポ記事については人間栄養学科地域栄養教育研究室ゼミ生がワードの抽出および分析を行った。また、デザイン画については環境に配慮した販促グッズとしてエコバッグ制作に活用した。中学校内で投票を行い、上位5作品をプリントしたエコバッグを制作し、各店舗の販促に活用している。



開発した商品（上段：六煎茶セット、
下段：江戸味噌せんべい（右）、うぐ
いすあんのほうじ茶どら焼き（左）



和食文化体験プログラムの様
子と中学生が描いたイラスト
をプリントしたエコバッグ

千代田区内の歯科医院における 医療連携の現状と課題

研究代表者：日本歯科大学附属病院 総合診療科2 准教授 小川 智久

1. 研究の背景と目的

現在の歯科医療はインプラントや審美など高度・細分化され、専門性が高まっている。また、全身的な疾患があるために歯科治療が困難になってしまう症例も増える中、他の歯科医院や病院との医療連携^{*1}は必須である。しかし、医療連携が円滑に進んでいないのが問題点として挙げられる。そこで我々は千代田区内にある歯科医院においてその医療連携の現状を把握し、病院間の円滑で密な情報交換が可能になるようなシステムの構築や媒体の作成を目指すためのアンケート調査を試みた。得られた結果から医療連携推進の媒体を作成し、より質の高い医療連携によって口腔内のみならず全身の健康増進を最終的な目的としている。

2. 研究内容

【研究対象】 千代田区内の歯科医院 282 医院のうち同意を得られた 115 医院

【方 法】 ①事前アンケートを実施（5月）

②医院向け医療連携推進ポスター（図1）と
患者説明用パンフレット（図2）の作成、配布

③効果測定のため再度アンケート調査を実施（12月）

【結果とまとめ】

事前アンケート調査より、現在の医療連携のシステムの改善点が明らかになり、さまざまな意見・要望を得ることができた。大学病院などに歯科治療を依頼する歯科病診連携^{*2}はほとんどの医院（97.4%）が行っていた。特に歯科病診連携では連携先の病院の予約が取り辛いという意見が多く、紹介先の病院の予約システムの改善についての必要性が挙げられた。

一方で医科歯科連携^{*3}については、医科との連携を行っている歯科医院は約40%程度であった。全身疾患を持つ患者に対して医科への対診を取っている医院が少ないように推察される。原因はさまざまあるが、改善策として歯科治療時に十分な配慮や継続的な管理の必要性について認識してもらうことがとても重要であると考えた。

事前アンケート結果をもとに連携啓発ポスター及びパンフレットを作成、配布を行い、医院で使用していただいたのち再度アンケート調査を行った。その結果、医科歯科連携については本事業開始前に連携を行っていたのは全体の約60%となり（開始前のアンケートでは約40%）、本事業により医療連携に関心を持つ歯科医院が増加し、医科歯科連携が促進された結果となった。（表1）

今後さらなる活動を模索し、医療連携を充実させることにより、安心・安全で質の高い歯科治療が提供できるようになると考えられる。

千代田区の商店街活性化についての調査・研究

研究代表者：法政大学 地域研究センター センター長 松本 敦則

1. 研究の目的と背景

東京の商店街を取り巻く環境は、コロナ禍における経済活動の停滞、東京 2020 オリンピック・パラリンピックへの期待、生産年齢人口の減少や働き方改革による就労状況の変化、キャッシュレス決済の促進機運、店舗の後継者不在等の大きな変化に直面しており、千代田区も同様のことが言える。

本事業ではこうした状況を踏まえ、千代田区の商店街の空き店舗の状況、商店街が抱える課題、後継者問題など商店街の実態を学生によるフィールド・ワークにより明らかにするとともに、商店街活性化の提案を行い、今後の千代田区商店街活性化施策の基礎資料とすることを目的とする。

本事業に関しては、平成 29 年度に策定された『千代田区商工振興基本計画 平成 29 (2017) 年度～平成 33 (2021) 年度ーコミュニティを大切にし、魅力あるまちを創造しますー』の達成に資するよう、計画とも整合性を図って研究を進めていく。

また、学生のフィールド・ワークなどによる課題設定や課題解決など、千代田区役所地域振興部商工観光課商工振興係の担当者と連携・相談の上、実効性のある研究をしていく。

千代田区役所の現実の課題に学生と共に正面から取り組むことが本事業の最大の特徴であり、差別化要因であるといえる。

2. 実施内容

研究代表者である松本が所属する専門職大学院イノベーション・マネジメント研究科、秋学期講義「中小企業政策論」において、アクティブラーニングの一環として実施した。

この講義は社会人向け専門職大学院（実務経験 3 年以上を要する）の科目となっており、36 名の学生がこの講義を受講した。このプログラム受講の多くの学生が国家資格である中小企業診断士の資格を取得する。彼らの多くは大学院修了後、プロフェッショナルな中小企業診断士として活躍する予定である。すべての学生が社会人経験者であるので、学部生とは違った視点での成果が期待できると考えている。

本事業の実施には、千代田区の地域の団体や商店街（千代田区商店街連合会、神保町すずらん通り商店街、神田古書店連盟、出世不動通り商店会、NPO 法人秋葉原観光推進協会）から地域に関する課題をいただき、学生により調査、研究を行った。この講義を受講した 36 名の学生を 6 班に分けチームを作り、質問事項の作成等を授業内で行い、その後各商店街組合の役員らにインタビューを行った。

また、千代田区役所商工観光課の末廣課長ら担当の職員の方 2 名に大学院の授業に来ていただき、千代田区内の商店街政策に関する現状や課題をお聞きし、学生とディスカッションを行った。さらに、現地調査を何度も繰り返し、授業の中でもグループワークを積極的に行った。

3. 成果報告会

令和3年11月10日（水）14時00分～16時20分に千代田区本庁舎近くの、高齢者サポートセンター「かがやきプラザ」ひだまりホール、（千代田区九段南1-6-10 1階）において、成果報告会を行った。各地域や商店街関係者、区役所職員、法政大学関係者らの参加を得て、各チームはそれぞれの担当の商店街、団体に提案を行った。なお本報告会は樋口高顕千代田区長、高山肇千代田区商店街連合会会長も参加された。

以下、紙面の都合で各班の報告会でのプレゼンテーション資料の表紙を取り上げる。



4. おわりに

1チームあたり15分のプレゼンテーション×6チームを無事に終えることができた。各チームの提案に対し、多くの方々から概ね前向きなコメントをいただいた。今回の「千代田学」の実施に対し、千代田区役所地域振興部商工観光課をはじめ、多くの方々から多大な協力をいただいた。法政大学地域研究センターとして、今後も千代田区の商店街や団体の方々と一緒に継続して関わっていききたい。

千代田区における外部空間の ニューノーマル

研究代表者：法政大学 デザイン学部 教授 岩佐 明彦

1. 研究の背景・目的

新型コロナウイルスの流行後、公共空間における滞在の様態には大きな変化が求められている。今までは「多くの人が集うこと」が公共空間の価値判断基準の一つであったが、感染予防の観点から密な接触を回避することが必要で、ある程度の間断性を持ちながら緩やかに人が集う仕組みや設えが求められている。特に昼間流入人口が大きい千代田区では、オフィスワーカーや観光来訪者の利用する外部公共空間を時間的・空間的にどう棲み分け、分散的な利用を促すべきかを検討していく必要がある。

本研究では現有する千代田区の外部公共空間（公園や街路など）を再検証し、公共空間利用のニューノーマル（新しい様態）を示すことで、新しい生活様式に対応した都市計画・都市政策の策定に資する資料の提供を行うことを目指す。

2. 研究対象・研究方法概要

本研究では千代田区内の全公園（「児童遊園」と「広場」を含む）63ヶ所を対象とした（図1）。調査は法政大学大学院デザイン工学研究科の大学院デザインスタジオ（2021年9月～22年1月）と連携し、デザインワークショップ形式で行った（表1）。

表1 ワークショップ概要

- ミッション1「千代田区の公園全踏破」
千代田区の公園を手分けして全踏破する（データシートの作成）
- ミッション2「公園や周辺を評価するためのパラメータ設定」
リサーチシートの作成
- ミッション3「パラメータに基づくリサーチ、評価」
リサーチシートを用いて評価
- ミッション4「千代田区公園ミシュランの作成」
リサーチシートをビジュアル化



図1 調査対象

3. 千代田区の公園全踏破

デザインスタジオではまずすべての公園を実際に訪問し、そこで滞在することで得られた情報を1公園ずつ1枚のシートにまとめることで千代田区内の全公園の実態把握を行うワークショップを実施した（図2）。

図2 スタジオ風景



4. 公園と周辺を評価するためのパラメータ設定とパラメータに基づくリサーチ

ワークショップにおいて、観察で得られた内容を共有し、都市の公園として必要とされる価値についてディスカッションし、その価値を評価するパラメータを設定し測定した。調査では「千代田

共同研究者：教授 福井 恒明、教授 今井 龍一、
客員研究員 金子 俊之、客員研究員 栗生 はるか、客員研究員 金谷 匡高

「区公園ビックデータ」と称し、計測可能と考えられるありとあらゆるデータを収集することとした。データは公園の物理的な形状に関するデータに加えて、インターネットのSNS等から抽出できるデータ、現地に滞在することで得られるデータ、地図上にマッピングすることができる周辺のデータに分けることができる。現地でデータを収集する際にはスマートフォンのアプリとして提供されているパノラマ撮影、騒音、日影（太陽の軌跡）等も活用した（表2）。



図3 千代田公園ミシュラン（一部）

5. 「千代田公園ミシュラン」の作成

デザインスタジオでは、ポストコロナのニューノーマル社会における外部空間の新しい利用形態を見据え、それぞれのスタジオ参加者が新しい公園の利用形態を提案した。その上で、その利用形態において検討が必要と考えられる評価項目を先の「千代田区公園ビックデータ」より引用し、そのパラメータで公園を評価付け（「千代田公園ミシュラン」）を行った。

スタジオ参加者からは「買い食い」（周辺飲食店からのテイクアウト）、「眺める場」、「隠れ場」、「生物多様性」、「オフィスワーク」、「クリエイティブメディテーション」、「マンウォッチング」、「まちなかシネマ」といった利用形態が示され、それぞれの利用形態における利便性に基づいて千代田区内の公園のランク付けを行った（図3）。

6. まとめに向けて

デザインスタジオではここまでのワークショップの成果を踏まえ、ニューノーマル時代の外部空間の利用について、具体的なデザイン提案にまとめたいと考えている。

表2 公園の評価パラメータ

- 公園の物理的形狀
 - 面積・入口の数と形態・園内の通り抜け・地面の種類（舗装、土など）
 - 付帯設備（トイレ、自販機、災害倉庫、ベンチ（形状）、遊具、樹木）
 - 隣接要素（公園に接する道路数、サブで接続する道路数）
 - 一番近い公園までの直線距離
- SNS（ネット）での収集
 - インスタグラムにおける投稿内容（投稿件数、視対象、視点場、コメント）
 - 代表的な公園での居場所（着座位置）の抽出
- 公園および周辺の観察
 - 通過した人で一番多かった属性
 - 公園の前道路を一分間に通過した人数
- 着座位置（視点場）の居心地評価
 - 視点場からのパノラマ写真の撮影
 - 視点場に座った時の開放性
 - 通路との位置関係、隣のベンチとの距離
 - フリーwifiなどの電波状況
 - パソコンや飲み物など置けるスペースの有無
 - 視点場の日陰時間
 - 騒音、音
- 周辺要素のマッピング（半径150m内）
 - 道路形状（歩道の有無、道路幅員）
 - 建雄用途（商業、教育、住宅、公共…）

コーヒーを軸とした神保町の街づくり (神保町コーヒー・プロジェクト)

研究代表者: 明治大学 情報コミュニケーション学部 准教授 島田 剛

1. プロジェクトの背景と目的

(背景) 神保町地域はとて魅力に溢れた街である。古くからある純喫茶が多く、これまでこの2つが相まってほかにはない特徴的な、文化的な街並みを形成してきた。しかし、現在、ブルーボトルなどのサードウェーブ・コーヒーの興隆の中で、若者の間ではコーヒーで神保町がイメージされることは少なくなってきた。神保町の古本屋街は長い歴史の中でその性格を変えてきた。かつては学生を中心とした一般読者に対して本を売っていた。しかし、かつてドル箱であった百科事典などは Google などの出現により買われることはなくなり需要が霧散した。また、古本屋もアマゾンなどオンラインで古本が購入できるようになってきたため、新刊書店も古書店にとっても新しい状況に対応していくことが必要になってきている。

(目的) こうした中、本プロジェクトは長期的に神保町をより魅力的な街にする提案と活動を行うことを目的としている。

2. 主な活動内容

(1) ホームページを通じた神保町の広報 (動画・インタビューなどの掲載)

本年度、特に年度当初は緊急事態宣言によって実地での調査が難しくなったため、セミナーという形で大学に神保町関係者に来ていただきお話を伺うことにした。そして、そのセミナーの結果を記事としてホームページに掲載することとした。こうすることにより神保町の魅力を多くの人に知らせることができると考えたからである。お招きしたのは千代田区神保町出張所長 武笠真由美さん、高山本店4代目社長 高山肇さん、神保町地区地域コミュニティ活性化委員長 青野芳久さん、ハーバード大学 スーザン・テラーさんなど。また、神保町のお店を紹介する動画を作成し SNS に掲載するなどした。

ホームページを訪問していただいた方は開設後約1年で6,247名(新規の閲覧者数)。国別では日本以外にアメリカ(128人)、中国(24人)、カナダ(16人)、韓国(12人)、アイルランド(8人)、オーストラリア(7人)、フィンランド(7名)や、ドイツ、英国、オランダ、エルサルバドル、ホンジュラス、アゼルバイジャン、ブラジル、コスタリカ、ニュージーランド、ロシア、パキスタン、ザンビアなど51ヶ国からアクセスいただくなど、海外からも強い関心が示された。

ホームページを訪問していただいた方は開設後約1年で6,247名(新規の閲覧者数)。国別では日本以外にアメリカ(128人)、中国(24人)、カナダ(16人)、韓国(12人)、アイルランド(8人)、オーストラリア(7人)、フィンランド(7名)や、ドイツ、英国、オランダ、エルサルバドル、ホンジュラス、アゼルバイジャン、ブラジル、コスタリカ、ニュージーランド、ロシア、パキスタン、ザンビアなど51ヶ国からアクセスいただくなど、海外からも強い関心が示された。



(2) コーヒーの街、神保町をイメージしたコーヒーの販売

大学予算により、神保町に本社のあるミカフェートと連携し明治大学SDGs コーヒー「神保町珈琲」を開発（写真）。オンラインストアで販売を開始予定（2月より明治大学グッズのオンラインショップにおいて）。「本に合う」をコンセプトとした、タンザニアのコーヒー豆のブレンドによるもの。

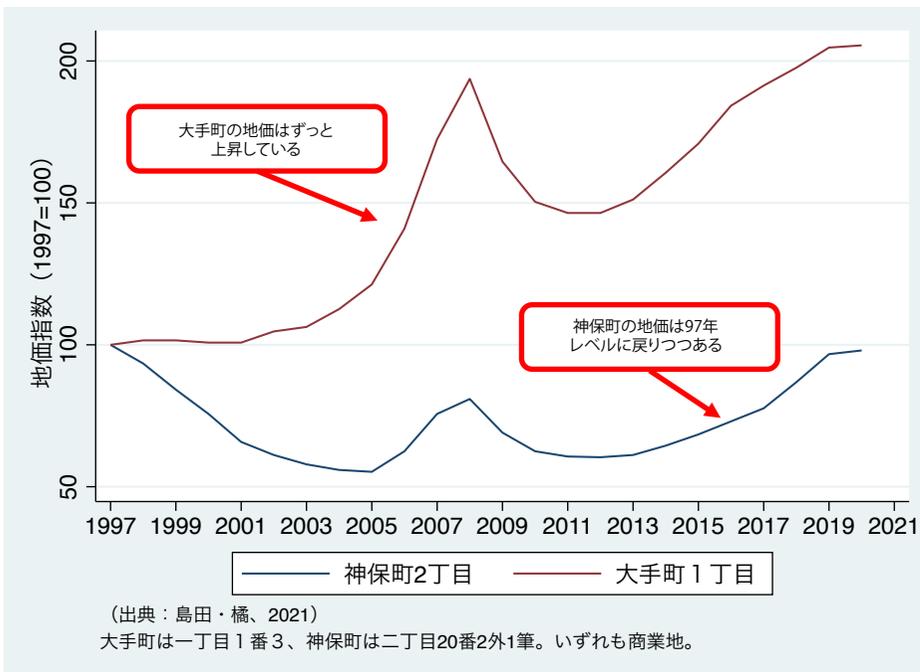
(3) 神保町を紹介するパンフレットおよびマップの作成

神保町の魅力を学生目線で紹介するパンフレット、およびコーヒー店などのマップを現在、作成しており2月以降に千代田区役所や神保町で配布を予定している。

(4) 神保町地域の街づくりの課題の分析

実施できなかった実地調査に替わり、現在、既存のデータに基づき神保町地域の街づくりについて分析中である。

その一環で、地価の推移について神保町と大手町の同一地点を比較したところ大きな差がついていることが分かった。しかし、再開発すれば現在の古本街を路面店に残すことは難しくなる。街の魅力を残しつつ、価値を高めていく街づくりについて現在、提言をまとめている。



国土交通省 土地総合情報システムの地価公示データに基づき作成

自然災害発生時における大学を拠点とした 帰宅困難者支援に関する研究

学生版KUG(帰宅困難者支援施設運営ゲーム: Kitakukonnansha shienshisetu Unei Game)の開発

研究代表者:東京家政学院大学 人間栄養学部 教授 酒井 治子

1. 研究の背景と目的

近年、地震や台風等の自然災害が発生しており、首都圏においても直下型地震やゲリラ豪雨などの予測困難な大規模自然災害が発生し、対策も行われてきている。

千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアムの5大学・2短期大学を含む大学では、千代田区と『大規模災害時における協力体制に関する基本協定』を締結し、大学が対応可能な範囲で「区民や一般の帰宅困難者の受け入れ」、および「情報・食糧・飲料水などの提供」等の使命を担うことになっている。

そこで、本事業の目的は、各大学の施設運営に関する計画や災害対応体制の再構築に関する課題を明確化し、災害復興や防災対策に役立てるために、千代田区における過去の災害の記録や記憶、また、防災に必要な情報・用品等をアーカイブ化することを目的とする。さらに、千代田区における災害対策・危機管理政策経営に資する大学版の帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発のための基礎資料を得ることを目的としている。

2. 活動内容

研究1 千代田区における過去の自然災害の歴史記録の集積と、帰宅困難者施設における防災に必要な情報・用品等のデータ収集

1. 千代田区における過去の自然災害の歴史記録の集積

千代田区における過去の自然災害について、①安政大地震(1855年)②関東大震災(1923年)の2つを中心に、関連する歴史資料の情報を収集し、データベース化を行った。資料としては、①は瓦版、鯉絵、古



関東大震災(大正12年9月1日)、避難場所を求めて東京駅に集まる人々
〔古写真・絵はがきより〕

絵図、②は古写真、古地図等を用いた。また、集積した情報をもとに、現在千代田区内に残る自然災害の痕跡(災害遺構)の確認を行った。さらに東日本大震災(2011年)発生時の首都圏での帰宅困難者の動静の情報を収集し、その内容の分析を行った。

2. 災害時に役立つ簡単クッキング方法の検討

学生が災害時の食事についてどのように考えているかを把握するためにアンケート調査を行っ

共同研究者：大妻女子大学短期大学部 教授 下坂 智恵
法政大学 法学部 教授 伊藤 マモル
共立女子大学 文芸学部 准教授 近藤 壮

た。家庭での備蓄はローリングストックが継続しやすく、糖質に偏らない食材を備蓄し、備蓄食品を組み合わせて食べることで栄養の改善になることから、日常において適切な備蓄を行い、災害時に作れる料理について実践しておきたいという積極的な意見が出された。そこで、災害時にできる簡単クッキングとして、①空中調理、②混ぜるだけクッキング、③保温ジャー利用による調理、④パッククッキング、⑤焼くだけクッキングを考え、試作・動画撮影を行った。学生からは「限られた食材でおいしく温かい料理が作れてとても良い学びになった」等の意見が出された。今後も新規レシピを考案して災害時に役立つ簡単クッキングの方法について検討を重ねたい。

研究2 帰宅困難者支援施設の健康管理

一時帰宅困難者受け入れ施設における避難生活が長引いた場合、災害に対する不安や緊張感などが引き金となり、体調を崩す可能性が高まるのはもちろんだが、問題は自身の体調の変化を自覚しづらいことであろう。そのため、避難施設における有効な健康管理マネジメントを開発する必要性は高いと考えられる。

そこで、一泊二日の模擬避難生活体験を目的とした防災キャンプ（初日 2021 年 10 月 2 日（土）、於：法政大学市ヶ谷総合体育館）に参加した学生を対象に、本研究への協力に同意した男女 13 名を被検者とし、ストレスの大きさを反映する唾液アミラーゼおよび食事や疲労に影響を受けるヘモグロビン濃度を測定するとともに、睡眠状態およびストレス調査を実施した（法政大学スポーツ研究センター倫理審査承認 2021-2 号）。その結果、唾液アミラーゼやヘモグロビン濃度（非観血的非侵襲性検査）には個人差が大きく、日常とは異なる環境での就寝や非常食を食した影響が示唆された。

研究3 帰宅困難者支援施設運営ゲームの体験会&学生ファシリテーター養成会

2021 年 12 月 4 日（土）、各大学から教員 10 名、学生 15 名が参加し、法政大学市ヶ谷キャンパスにて実施した。この活動は、法政大学の一時滞在者支援施設を縮小して作成された帰宅困難者



支援施設運営ゲームを用いた図上訓練とともに、グループワークによるゲームを牽引する学生のファシリテーター養成の役割もある。発災時において、帰宅困難者支援施設の開設に伴って、どのような安全・衛生管理、感染症対策、備蓄品、通信手段などの確保、情報提供体制など、施設運営に関する情報共有が必要であるのか、学生間で協議しあい、臨場感を伴った体験ができた。

地域貢献プロジェクト

広く地域の皆さまへ大妻女子大学の教育と研究成果を還元し、皆さまの多様な学習ニーズに応えるとともに地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動の推進を図ることを目的として、平成 26 年度からスタートしました。

今年度は 2 件のプロジェクトが採択されています。

令和 3 年度 地域貢献プロジェクト採択課題

健康な女性のための「食・運動・医」オンライン講座の開設
(家政学部 食物学科 教授 川口 美喜子)

小学校の読書活動推進への貢献を図る学生ブックソムリエの展開
(家政学部 児童学科 准教授 樺山 敏郎)

大妻女子大学地域連携推進センターは、地域を対象とした教育・研究活動等を通じて、地域の皆さまと交流を深めるとともに、本学が持つ知的資産を地域へ還元し、地域を発展させるための取り組みを行って参ります。



地域連携プロジェクト報告

大妻女子大学では、学生の主体性や自立心が身に付く地域連携活動の一層の推進と発展を図ることを目的として、平成 25 年度に「地域連携プロジェクト」を創設しました。「地域社会との連携を活性化するとともに、学生の教育に資する活動」をテーマに、今年度は 10 件のプロジェクトが採択されています。

和装振興プロジェクト ～伝えよう!和服の魅力～

代表者：家政学部 被服学科 教授 阿部 栄子

【プロジェクトの目的】

本開催を通して、世代を超えた人々が広く和服に興味を持ち、日本文化への理解を深め、着実に後世へと「きもの文化」を伝承していくことを目的とした。

【プロジェクトの概要と実施効果】

これまでに、本学被服学科における卒業研究（和服製作）はいくつかの団体・地域から注目され、数年前から日本橋（東京）における“きものサロネ in 日本橋”において学生きもの優秀作品として、公開展示されています（日本橋 東京・COREDO 室町2）。令和3年度も和装きもの3点が選定されましたので、これらの作品展示とコーディネートを本プロジェクトの学生が担当するとともに、展示期間中の解説を担当しました（展示公開：令和3年10月23・24日、東京国際フォーラム Eホール）。

本展示の開催は、在学生、卒業生、地域住民を対象として実施することに加えて、さらに、都内および近郊の染織工房訪問や職人の技について、見学会や熟練された技術者から体験談などが聞ける機会を確保したいと思い、計画したプロジェクトです。これらの実施を通して、日本文化への理解がさらに深まったことは大変に意義深いことと思っています。また、この活動を通して、「きもの（和服）」を多くの若い人たちが気軽に楽しめる衣服として身近に捉え、和服製作・着装を含めた実技をも指導できる本格的なプロジェクトチームとして成長したいと考えています。学生自ら、和服の製作、目的別コーディネート・着装を学ぶ中で、自信を持って人に伝えることによって、学びの自信につながったものと感じています。



展示の様子（東京国際フォーラム Eホール）
「本学からの作品（右手3体）」



閲覧の様子



展示ポスター

三番町アダプトフラワーロードの会との 地域美化活動

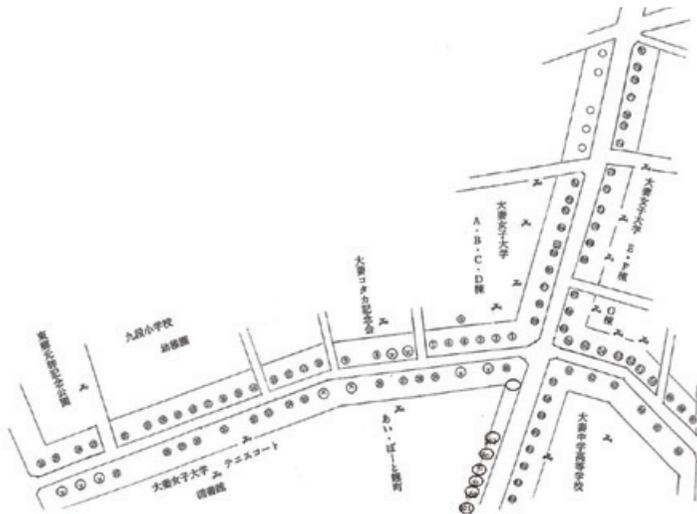
代表者：家政学部 児童学科 教授 石井 雅幸

三番町アダプトフラワーロードの会という名称で、千代田区立九段小学校、千代田区立九段幼稚園、三番町会、(株)プランナー・ワールド、あい・ぽーと麹町、大妻学院が協定を結んで2007年から行ってきた取り組みです。

2021年11月11日と12日、3年ぶりに千代田区立九段小学校の児童の皆さん・千代田区立九段幼稚園の園児の皆さんと花植え活動を行うことができました。

毎年、春に夏の花を秋に冬の花を三番町フラワーロードの会のメンバーで植えてきました。春は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、九段小学校・九段幼稚園の皆さんは参加できませんでしたが、11月11日は、大勢の会のメンバーで賑やかに花を植えることができました。パンジー、ビオラ、ノースポールとどんなバランスで植えるとよいか検討しながら植えていきました。本学の学生も子供たちと一緒に活動できることを楽しんでいました。

それ以後は、本学の学生が交代で花に水をあげたり、草取りをしたり、ゴミ拾いをしたりしながら花を育てています。現在では、図のような100カ所近くの場所の花の管理を行っています。これからも会の皆さんとすてきな三番町を大切に守っていきたいと思っています。



花植えの様子

プロジェクト構成員：准教授 厚東 芳樹、専任講師 林 明子、助手 酒寄 翠
家政学部児童学科児童教育専攻 1年と2年の学生

保育の魅力を保護者に伝えるための、 少子化地域の行政との協働プロジェクト

代表者：家政学部 児童学科 准教授 石井 章仁

子どもの数が減少している昨今、人口減少が緩やかな都市部と、急激な減少を呈している地方と大きく分かれている。これからの保育を考える時に、この「人口減少地域」において、保育や子育て支援をどうするかは、我が国の社会的なテーマの一つとなっている。

今回、協働プロジェクトを行う東金市は、千葉県の東部の沿岸に位置し、年々子どもの人口減少が進む都市の一つである。東金市では、ここ5年、保育の質の向上を目指し、園での研修のあり方の改善や幼保統一カリキュラムの構築、自己評価の公表等を行ってきた。今回参加する学生は、こうした行政の保育に関する取り組みを理解し、実際に園に赴き取材し、保育の魅力を地域の子育て家庭に伝えるための媒体を作ることを目指してプロジェクトが始まった。

7月、まず、オンラインで行政の担当課と打ち合わせを行った。学生からは、SNSでの発信や手元に残る冊子などの提案があった。担当課の職員からの要望や行政としての限界をお聞きし、方向性を模索するとともに、8月、5名の学生と教員で、現地を見学した。

実際の作業は、後期の「児童学専門演習Ⅱ」の中で行った。総ページ数や写真を多く使うというコンセプトを決め、タイトルを「とうがねの園どうかね」とすること、取材チーム（2名ずつ5園）と編集チーム3名を決めるなど、準備は整っていた。

途中、保育実習Ⅱもあったため、方向性と柱を決める程度となり、実際の取材は12月下旬となった。12月27日、市内の5つの公立園に2名ずつ分散し、午前中の保育を取材した。所長・副所長先生に案内されたり、インタビューしたり、



実際の子どもの遊びの様子を観察したり、時間はあっという間に過ぎたが、ちょうど、冷え込んだ日だったため、氷や霜柱などで遊ぶ子どもの姿を撮影することができた。また、園で取り組んでいる遊びや、園内研修の様子も取材することができた。

良い写真がたくさん集まった。年明けの1月の授業時に、編集作業を行い完成まであと少し。完成後は、東金市に寄贈するとともに、公共機関や健診などで配布していただく予定である。



科学技術館との地域連携活動における野外活動プログラム および学習用ワークシートの作成プロジェクト

代表者：家政学部 児童学科 常勤特任准教授 木村 かおる

学校における理科教育では、自然体験活動の重要性や、指導が難しい単元では地域の科学館等の利用が望まれています。さまざまな科学館等は、学校では指導しにくい自然体験活動プログラムなども実施しており、学校教育で不足している活動や家庭教育では負担の大きい活動を補っています。しかしながら科学館等のイベントは一過性のものが多いため、よいプログラムであっても持続することが困難です。このプロジェクトでは、自然体験活動での Good Practice を調査し、いつでもだれでも利用できるように指導案やワークシートを開発して蓄積することによって、地域連携活動として長く継続できる仕組みをつくることを目的に実施いたしました。

活動では、子どもたちの自然体験プログラムとして「多摩川源流の観察」をテーマに、地理学の専門家とともに実地踏査を行い、観察会を実施しました。観察場所は後日個人でも行くことができる場所として、多摩川源流の家族向けのハイキングコースを選び、地図に目的の「岩石」の種類や分布、大きさを書きいれるワークシートを作成し、実際に子どもたちに実施してもらいました。子どもたちは、地図を見ながら自分たちの位置を確認したり、石の種類や大きさなどを書き込むことができました。また、観察で注目した「岩石」をさらに探求活動へと発展させるために、研究機関における教育普及活動 (E/PO) をどのように活用できるかを調査することができました。

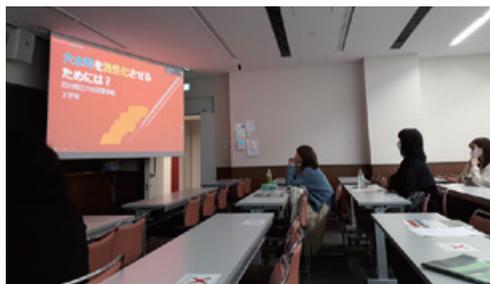
プロジェクトの成果としては、比較的都心部からアクセスがよく、家族向けのハイキングコースでも理科の要素を加えるだけで、家族旅行や遠足が探求可能な自然体験活動として成り立つことが分かりました。また、参加した学生は野外活動のスキルの向上、連携活動の一端を担うことで専門家や保護者との協力体制について学び取ることができました。今後も、専門家とともにプログラムの検討を行い、提供できるコンテンツを増やしていきたいと思えます。



能登の里海を守る： 海育実践と地域活性化プロジェクト

代表者：社会情報学部 社会情報学科 環境情報学専攻 教授 細谷 夏実

私たちのゼミでは、能登半島にある穴水町を主な活動の場として、里海里山保全の活動や、地元の子どもたちに海の大切さや楽しさを学んでもらう海育（うみいく）の活動等を行ってきています。これまでの活動の成果は、穴水町と本学との包括連携協定締結にもつながっています。



穴水高校生のプレゼンテーション（画像を一部加工）

【目的】

今回のプロジェクトでは、里海保全についての理解を深め、地域活性化の助けとなるような情報発信を行うこと、また、穴水町との連携実績を活かして新たな海育の取り組みを行うこと、を目指しました。

【活動内容】

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大が続いた影響で、実際に穴水町に出かけて活動することは叶いませんでした。しかし、これまで培ったつながりを活かして、以下のような取り組みを行いました。

○穴水高校とのオンライン交流

穴水高校の生徒と Zoom を使ったオンライン交流を初めて実施しました。最初に、総合的な探究の授業で観光客誘致のために町の PR や商品開発に取り組んでいる穴水高校の生徒 5 名が、活動についてプレゼンテーションを行いました。その後、ゼミ生と意見交換を行い、ゼミ生からは、SNS 活用等のアイデアが提案されました。さらに、日頃のゼミ活動で収集した穴水町や能登についての情報を踏まえ、都会から見た穴水町の魅力も伝えました。

○向洋小学校の子どもたちとの「うみいくカード」の作成

2018 年度から向洋小学校と協同で行っている「うみいくカード」の作成を、今年度も実施しました。小学校の先生方と子どもたちの協力で、3 年生がふるさと教育で実施しているかき棚見学を題材とした絵と文章を活かしてカードにしました。

【まとめ】



オンラインでの交流をする学生の様子

今年度は、大学祭での展示や、町のイベントへの参加など、予定していた活動の多くが実施できませんでしたが、一方で、オンライン交流という新たな取り組みを実施することができました。

今後も、里海保全や地域の活性化に向けて、地域の方たちと力を合わせていろいろな取り組みを行っていきたくと考えています。

多摩ニュータウン松が谷プロジェクト推進と 寺子屋活動の推進

代表者：社会情報学部 社会情報学科 情報デザイン専攻 教授 炭谷 晃男

1. 経緯

2021年は多摩ニュータウンへの入居開始50年目、多摩市市制施行50年の記念すべき年である。多摩ニュータウンも成熟度が増してきたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、これまで潜在化していた問題が一挙に顕在化してきている。現行のハード面と暮らし方のソフト面との齟齬である。これからの時代は新たなハードをつくる「まちづくり」ではなく、これまでであるハードをリフォームしながら人々の暮らしを支えるソフト面を重視する「まちづかい」の時代に入ったと言える。そこで、入居40年を経過した八王子市松が谷地区の再生プロジェクトに協力しながら、住民の方を支援するプロジェクトに取り組んだ。さらに、寺子屋活動は月に1回程度、八王子市内の小学校施設を借用して小学生のためのサタデースクールを実施するもので、継続的に実施した。

2. プロジェクト

a. 鹿島・松が谷再生プロジェクト

八王子市主催の「かしまつ Re:Live 鹿島・松が谷地域のまちをつかうための実証実験」(10月21日～10月24日)に参加した。私たちのプロジェクトは10月22日、23日の2日間参加した。実施した内容は、①松が谷中学校の協力を得て中学2年生とその保護者向けアンケート結果の展示、②当日ブースに来ていただいた方の写真を撮り、その写真にこの地域への想いを記入していただいた。当日作製したのが右図の「かしまつの樹」である。これには富士フィルム(株)の協力を得てチェキ20台をお借りすることができた。さらに、3月のイベントでも展開したいと考えている。



b. 子どもの居場所プロジェクト：寺子屋

多摩キャンパス周辺の八王子市立松木小学校、長池小学校で月に1回程度土曜に学校の教室や体育館を借りて子どもの活動を支援する寺子屋活動を実施した。寺子屋の活動内容としては寺子屋学習教室(漢字検定)、ダンス、綿棒アート、ポッチャ、プログラミングカー、プラ板、万華鏡教室などを実施した。11月には大妻女子大学のバルーンアートサークルの「ぼろん。」にも参加してもらった。

ポッチャはパラスポーツの一種であるが、障がい者スポーツとしてだけでなく、老若男女誰でも、障害の有無を超えて楽しめるユニバーサルスポーツでもある。ポッチャがオリンピックのレガシーとして定着してほしいと願って取り組んでいる。11月に実施したポッチャ体験会では、高齢者サロンの方がポッチャを楽しまれた。

謝辞 学生たちにこのような地域社会で、ほかの団体とのコラボレーションを通じて、子どもや大人にかかわる機会を与えていただいた「大妻女子大学地域連携プロジェクト」に感謝申し上げます。

みんなで防災大作戦!～防災を日常に～

代表者：人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻 准教授 堀 洋元

〔目的〕

プロジェクト活動6年目である今年度はコロナ禍が続く中、防災のためだけでなく日常生活とリンクした防災への取り組みとなることを目指したプロジェクト活動を継続して実践しています。

〔プロジェクトの概要〕

1. 4年生から3年生への引き継ぎ

前年度コロナ禍での活動内容や実現に至らなかったアイデアを引き継ぎ、ゼミとして持続可能な取り組みを意識して積み上げていくことを志していくことになりました。今年度のテーマおよびサブタイトルは、それぞれ3年生、4年生の発案によるものを組み合わせたものです。

2. 専門的な学びを活かした地域との交流

タイトルに象徴されるように、日常生活とリンクした取り組みを提案するべく、地域の方々との交流を実践することになりました。学生が専攻する心理学の学びを活かしてアンケートやヒアリング、ディスカッションを行い、地域の方々のニーズや提案内容を検討することになりました。

3. 4つのテーマとチームづくり

前年度の活動実績や防災ゲーム体験イベントで情報収集したものの中から検討した結果、(1)多摩版防災カードゲームの開発、(2)役立つ防災アプリの紹介、(3)ユニバーサルデザインを活かした防災食評価尺度の開発、(4)身近にあるものを有効活用した防災グッズの紹介を今年度のテーマとしました。テーマごとに2～4名のチームを作り、ゼミ全体で情報共有しながら成果を発信すべく取り組み始め、現在に至っています。



ゼミを終えてのひとコマ

4. 体験学習と地域の方々に向けた提案の準備

各チームによるアイデアをゼミ内で体験し合うことから実践活動が始まりました。たとえば、地域の方々に紹介した防災カードゲームの改善点を共有して、ゼミのメンバー同士で実践して感じた改善点を収集し、改良に活かすことになりました。また、大学で備蓄している食品と同じサンプルを試食しておいしさを評価し、温めた場合、常温の場合でどのように味わいが異なるか、数パターンを設定しておすすめの味わい方が提案できるか試行錯誤中です。震災語り部の方による講話は、被災地域での防災を考えるよいきっかけとなりました。

〔プロジェクトの効果〕

コロナ禍が続き、当初の計画通り実践活動が立ち行かないこともありましたが、地域の方々に関わりを持つことで責任感や自覚を持って主体的に取り組む機会が得られました。ここに感謝の意を表します。今後も地域の方々と有意義な交流を深めていき、学生たちの斬新なアイデアを地域の方々にも沿うよう形にして発信していきます。

からきだ匠カフェ～地域がつながる場所～

代表者：人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻 准教授 八城 薫

多摩キャンパス（唐木田）周辺は病院、福祉施設、教育施設などさまざまな施設が存在し、身体や心に不安を抱えても安心して暮らすことのできる環境が整っています。そこで働く専門家（匠）集団が連携して吸引役となり、日頃から地域のさまざまな属性、世代の方々とつながるような居場所づくりをすることで、いざというときに助け合えるような地域でありたい。そんな想いから2017年度4月、あい介護老人保健施設、社会福祉法人 楽友会、多摩市社会福祉協議会の方々との連携で活動をスタートさせ、このプロジェクト“からきだ匠カフェ～地域がつながる場所～”が生まれました。「からきだ匠カフェ」は2020年度からは、唐木田駅から徒歩すぐの“Planet Café（プラネット カフェ）”さんに場所をご提供いただき、毎月第4水曜日の14時から2時間ほど、開催しています。新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言などもあり、8月・9月は実施することができませんでしたが、10月から活動を再開しています。

本学からは、大学院臨床心理学専攻の院生と社会・臨床心理学専攻の学部生が企画メンバーとして活躍してくれています。お子様からお年寄りまで、さまざまな方々で一緒に楽しむ場所・空間づくり、「共生社会」の実現を目指す本学学生の実践の場づくりを目指して、これからも楽しく活動を続けていきます。

♪テーマソング

「からきだ匠カフェ～笑顔の咲くところ～」

からきだの道に 百本シダレ
桜咲くこの街に はじまる物語
からきだ通りに 咲くハナミズキ
唐木田のこの店に 集まる屋下がり
歳のせいだとか 病気のせいとか
そんなことは忘れて 笑顔咲くところ
からきだ匠カフェ だれもが匠だね
笑顔と歌で 広がってく
世代を超えて 僕らをつなげる 架け橋さ

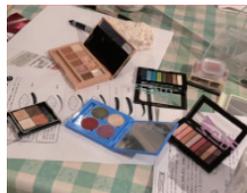
本学からは、大学院臨床心理学専攻の院生と社会・臨床心理学専攻の学部生が企画メンバーとして活躍してくれています。お子様からお年寄りまで、さまざまな方々で一緒に楽しむ場所・空間づくり、「共生社会」の実現を目指す本学学生の実践の場づくりを目指して、これからも楽しく活動を続けていきます。

毎月の活動内容（テーマ）

6月23日（水） コロナ禍だけど…認知症のこと気になりますか？
～これって先生に診てもらった方がいいの？
（オンライン）

7月28日（水） 緊急事態宣言中によりオンラインで近況座談会
＝ 8月・9月は中止＝

10月27日（水） 元気になれるメイクセラピー
～なりたい自分になる
ワンポイントアドバイス



11月24日（水） もしバナゲーム
～もしも、あなたがあと半年の命だったとしたら…？

12月22日（水） クリスマスのオーナメントづくり

1月26日（水） 新年会（対面・オンラインのハイブリッド開催）

2月23日（水） 大妻生企画 クイズ大会（オンライン）

3月23日（水） 大妻生企画 2
オンラインでヨガレッスン



※上記の企画実施のために、毎月1回程度で企画会議を行っています。

持続可能な食を支える食育推進プロジェクト

代表者：短期大学部 家政科 食物栄養専攻 教授 堀口 美恵子

【目的】

栄養・食・健康に関する問題は、SDGsの各目標に影響を及ぼす重要な要素である。本プロジェクトでは、人々の健康と幸福に貢献する栄養士の立場から持続可能な食を支える食育活動を行い、食や環境に対する意識の向上を通じて心身の健康づくりに寄与することを目的とした。

【主な活動内容】

1) 広島県世羅郡世羅町との主な連携活動

本学創立者「大妻コタカ」の出身地である世羅町は、以前より里山保全に積極的に取り組んでおり、自然の地形を活かして栽培されるさまざまな農産物や四季折々の花々が有名である。本プロジェクトでは、環境に配慮して生産されている世羅町特産品の活用に向けて、オンライン交流会を実施した。世羅町役場や世羅茶、世羅米、世羅梨の生産者の方々からは「環境保全への取り組み」について、世羅高等学校の生徒さんからは「間伐材を活用したアロマによる里山保全活動」について報告を受けた。本専攻からは今まで実施してきた「世羅町食材を活用した学生レシピコンテスト」のほか、「間伐材・ドライフラワーを活用したクラフト」や「世羅ワイン製造過程で出るブドウの搾りかす・世羅茶の出し殻を活用した染色」を地域のイベントで活用している事例について紹介した。その後のディスカッションの結果、規格外などの理由で廃棄処分されてしまう世羅梨の有効利用に取り組むことになり、学生や卒業生がレシピを考案して都内の子ども食堂で提供した。また、学内食堂ではポテトサラダ、区内高齢者施設ではコンポートとしても提供し、好評であった。

また、TABLE FOR TWOが主催する世界食糧デー記念「おにぎりにアクション2021（おにぎりの写真を投稿することで貧困地域に暮らす子どもたちに給食をプレゼントできる取り組み）」に参加し、世界の食糧問題について主体的に学ぶことができた。おにぎりには世羅町のダルマガエル米（絶滅が危惧されているダルマガエルのおたまじゃくしを水田で育てながら無農薬で栽培するお米）、および、炒り糠、おから、手作り味噌なども用い、和食文化の保護・継承活動は生物多様性保全にもつながることを理解した。

2) 千代田区との主な連携活動

ちよだコミュニティラボ事務局が主催した「ちよだコミュニティ ラボライブ！2022」に実行委員として参加し、上記活動など本プロジェクトの成果の一部を報告して評価を受けた。

「就学準備教室 りりーふ」が主催した「千代田こどもの芸術祭」に運営協力者として参加した。魚・米・寿司に関するクイズコーナーとエコなクラフトコーナー（食材の廃棄部分で染色したフェルトや毛糸のコサージュとストラップ、廃棄される米紙袋とビーズのストラップ）を担当し、子どもたちに食と地球環境の大切さ、および、和食文化について楽しく伝えることができた。

【まとめ】

栄養士の立場から、SDGs達成につながる食育の推進について、世羅町や千代田区との連携を目指した活動を行った。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、予定していた対面でのイベントが一部実施できなかった一方、連携に向けたオンラインでの意見交換や情報共有については今まで以上に効果的に行うことができた。

地域の多世代がつながる味噌作りプロジェクト

代表者：短期大学部 家政科 食物栄養専攻 准教授 富永 暁子

【目的】

千代田区近隣住民および在勤者を対象に、大豆の栽培・収穫からみそ作りまでの体験プログラムを提供することで、食の循環を意識してもらうことを目指した。また、千代田区内で造られた「米麴」を使うことで地域性をもたせることにした。具体的には、「みそ」「大豆」「食文化」をキーワードとして食育の観点から和食の大切さを伝え、家庭や地域での和食の継承を通して、豊かな食生活を考えるきっかけを作り、知識や調理技術だけでなく、多世代交流により地域が活性化することを目的とした。

【プロジェクトの概要】

1. 大豆を栽培・収穫体験（7月～11月 学内ハーブ園の一部使用）

近隣の専門家から助言を受け、7月に多種類の大豆の種まきを行い、発芽してから定植を行い、その後観察記録を付けました。9月下旬の枝豆の段階で、一部収穫して試食し、その後11月にさやが乾燥し、大豆になったところですべてを収穫した。



種まき

栽培

収穫

講座の材料受け渡し

オンラインみそ講座

2. 手作りみそ講座①（10月28日 zoomを利用したオンライン開催）

区内の小学生の親子および区内の特別養護老人ホームいきいきプラザの高齢者を対象に大豆の栽培からみその作り方までの内容を実施した。「大豆の栽培と収穫レポート」「大豆から作られる食べものクイズ」「千代田区内のみそ屋さんのお話（動画）」「いろいろなみその特徴について（試食）」「手作りみその作り方とみそ料理の紹介」について、それぞれ学生と協力して資料を作成した。

3. 手作りみそ講座②（1月29日 zoomを利用したオンライン開催）

先着により決定した参加者とスタッフ合わせて約40名がみそ作りに参加した。みその作り方のレクチャーを受けた後、6グループに分かれ、スタッフの進行に合わせてみそ作りをし、その後全員でみそに関する食育クイズによって交流を行った。講座②の参加申し込み者は、キャンセル待ちを含めて100名程の申し込みがあり、みそ作りへの関心の高さがうかがわれた。

【今後に向けて】

- ・学内ハーブ園で栽培した大豆は収穫量が少なく、今回のみそ作りの材料とすることができなかったため、今後は栽培方法について検討していきたい。
- ・今回のみそ作り講座はオンライン上での開催のため、多世代交流に限界があった。
- ・半年後に完成するみそを使って多世代交流ができるよう、みそ汁交流会などを計画をしていきたい。

プロジェクト構成員：堀口美恵子、小野友紀、石井恵子、小林雪子、ワゲラ久美子、
食物栄養専攻の学生ほか

みそ作り協力：三河屋綾部商店（千代田区外神田）

大妻さくらフェスティバル俳句大賞

大妻さくらフェスティバルのイベントの一つとして、俳句大賞を実施いたしました。今年度は「節分」「星」をテーマに、全国各地の幅広い年齢層の皆様から、1,463句の作品が寄せられました。たくさんのご応募ありがとうございました。厳正な審査の結果、入賞した作品を発表します。

理事長・学長賞

テーマ「節分」

小学生以下の部

追ひ払えぼくのあまのじゃく鬼は外

神奈川県秦野市 諸田 和真

中学・高校生の部

コロナ禍デイスタンスする豆まきや

石川県金沢市 齋藤 康輔

一般の部

明日からはどこで過ごすや鬼やらひ

東京都世田谷区 布施 無門

テーマ「星」

一般の部

銭湯へ下駄の小走り冬の星

熊本県八代市 貝田 ひでを

一般の部

天狼の中村哲よ永久へゆけ

東京都西東京市 岡崎 実

優秀賞

テーマ「節分」

小学生以下の部

豆まきをしているところ星がでた

東京都江戸川区 堀川 凜空

鬼は外仲間はずれだかわいそう

東京都江戸川区 酒井 言実

節分の豆撒き家族で笑いあう

東京都江戸川区 神原 紗希

中学・高校生の部

小さな手たくさんつかんでおにはそと

石川県金沢市 堀川 遥名

豆まきに児童のかけ声空響く

石川県金沢市 小出 啓太郎

今は亡き祖母の節分豆腐け

栃木県栃木市 石塚 瑞貴

一般の部

義母の手に握らせ三粒豆を打つ

栃木県宇都宮市 青柳 婦美子

笑いつつ祖父母喰えぬと福の豆

新潟県新潟市 地引 文貴

上京し空の部屋にも豆を撒く

神奈川県横須賀市 須山 恵美

優秀賞

テーマ「星」

小学生以下の部

冬の星かみさまがいる星がある

東京都千代田区 河村 和希

けんかして空見上げたら冬銀河

東京都江戸川区 和田 琴梨

中学・高校生の部

冬北斗雪にまぎれて光りけり

石川県金沢市 朝倉 康太

星冴ゆる窓の暖炉の匂ひかな

埼玉県坂戸市 徳永 小雪

一般の部

登園の声待つ遊具春の星

神奈川県川崎市 久保田 聡

コッフェルに沸く豚汁や流れ星

東京都練馬区 伊勢 史朗

寒星や娘見送る飛行場

神奈川県横浜市 清田 三四郎

イベント団体紹介

千代田区立九段小学校 九段囃子の会

「九段囃子」は九段小学校の特色ある教育活動の一つとして、3年生から6年生が地域の方に指導していただいています。週に一度、金曜日に活動してきました（今年度は感染症対策のため活動を休止しています）。

江戸祭囃子の音は私たちの心に心地よくしみわたっており、地域の祭りに欠かせないものです。九段囃子の活動は、子どもたちが日本の伝統文化を通じて地域行事や地域活動に触れるよい機会となっています。

お囃子は、神に捧げる音楽「神楽」に端を発している民衆音楽ですが、長い歴史の中で伝承されてきた古典のリズムや技法、音色を届けようと、練習を重ねています。

大妻嵐山中学校高等学校 ダンス部

皆さまごきげんよう。大妻嵐山中学校・高等学校ダンス部です。今年も大妻さくらフェスティバルに参加することができ、嬉しく思っております。

私たちは、中学生・高校生共に活動し、創作ダンスをメインとして、バレエやジャズダンス、HIPHOPなど幅広いジャンルに挑戦し、技術が向上できるよう日々練習を重ねています。中学生は、文化祭などの校内や校外でのイベントの発表に向けて、高校生は、校内や校外でのイベントの発表と創作ダンスのコンクールの入賞、特に神戸で行われる全国大会での入選・入賞を目標にしています。

今回の動画は、今年度10月に行われた本校での文化祭を編集したものです。コロナ禍の生活が続いている今、2年ぶりの有観客でのステージ発表ができることに感謝し、「Turn back time ~ Always with you ~」というテーマを掲げ発表しました。

大妻さくらフェスティバルでは実際に踊ることはできず残念ですが、大妻さくらフェスティバルで踊れる日がくることを願って、これからも部員一同、練習に励んでいきます。

私たちのダンスを皆さんに楽しんでいただけたら幸いです。

<https://youtu.be/njgrB3sWNp8>





読み終わった本を寄付しませんか？

不要となった書籍を地域連携・地域貢献を目的とする活動資金として使用させていただきます。

「大妻古本募金」は、みなさまのお手元にある不要になった書籍の売却額が株式会社バリューブックスを通じて全額大妻学院への寄付金となる仕組みです。大妻さくらフェスティバル 大妻古本募金（2022年3月31日（木）まで受付）でいただいた寄付金は、大妻女子大学地域連携推進センターの活動に使用させていただきます。

※未成年者の方は必ず保護者の方にご相談いただき、本学の趣旨にご賛同いただいた上で、ご寄付いただけますようお願い致します

大妻古本募金の対象となるもの

2010年以降に発行された書籍

2010年以前に出版された本のほとんどがお値段をつけることができないため、「2010年以降に発行された書籍」と限定させていただきます。

大妻古本募金申込

WEBでお申し込みください。

<https://www.charibon.jp/donation/action.cgi?id=265>

お申し込みいただく際、入力画面の「集荷先情報」の「氏名」の前にアルファベットの「A」を入力してください。氏名の前に「A」が入力されている方の古本募金は、大妻さくらフェスティバルによるご寄付として頂戴いたします。



charibon
by VALUE BOOKS

使い方 寄付にならない本 支援先 **本で寄付する**

集荷先情報

氏名	必須	A大妻 花子
カナ	必須	オオツマ ハナコ

ご自宅段ボール箱に詰めてWebで申込みをするだけ。**5点以上から上限3箱までなら送料はかかりません。**お部屋のお掃除で見つかった読まなくなった本をご寄付ください。

※買い取り価格は需要と供給で決まるため、寄付していただいた本の状態が良くても値段がつかないこともありますので、ご了承ください。

※大妻古本募金では、値段がつかない本を運営会社の株式会社バリューブックスを通じて国内の福祉施設、図書館、海外の教育研究機関に寄贈します。

※税制上の優遇措置（寄付金控除）の対象となります。ご希望される場合は確定申告が必要となりますのでお手続きをお願いします。

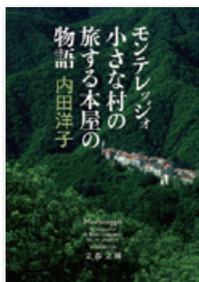
図書館員オススメ書籍紹介



コロナ禍で気軽に外食も旅行もできない、いつまでもマスク生活が続き憂鬱... そんな時は、本を読んで気分を変えてみませんか。

大学図書館の職員がオススメの本をご紹介します。お近くの本屋さんか図書館で、ぜひ探して手に取っててください。どこか遠くの街や人や自然に思いを馳せたり、誰かの悩みやその回答にうなずいたり首を傾げているうちに、モヤモヤも晴れていくかもしれません。

(本屋さんや図書館へお出かけの際は、感染防止対策をお忘れなく。)



『モンテレッジョ 小さな村の 旅する本屋の物語』

文春文庫

- 著者：内田 洋子
- 出版社：文藝春秋
- ISBN：9784167917876
- 刊行年：2021.11

モンテレッジョはイタリア、トスカナ州の山奥にある小さな村だ。地図を見ても、周囲に知っている地名がない。村にぎわうのは、本が主役の夏祭りの時だけ。本が主役の夏祭りとは？ いったいどんな村だろうと、実際に行ってみてみれば驚くことばかり。突然、飛び込んできたヘミングウェイの顔写真に、立派な石のモニュメント。「ここはいったいどこなのだ」。ここは、本とその露天商人の故郷。文字を読める人が少なかった時代から、春が来ると本を担いで村を発っていった。何故、ヘミングウェイの顔写真の看板があるのか、もちろんこの村だからこそその理由がある。そんな露店商人と本にまつわるエピソードが詰まった一冊。



『旅をする木』

文春文庫

- 著者：星野 道夫
- 出版社：文藝春秋
- ISBN：9784167515027
- 刊行年：1999.3

星野道夫はアラスカを拠点に活動した写真家だ。写真だけでなく、たくさんのエッセイも書いた。その中の一つ「もうひとつの時間」では、人間社会と自然の悠久な時間が交差する。人は美しい自然を見た時、愛する人にどんな表現ができるだろう。どんな方法もすべてを伝えることはきっとできない。それよりも、自分が変わっていくことで、伝えることができるだろう。日々の時間に追われている時、今この瞬間もどこかでクジラが飛び上がっているかもしれない、クマが寝息をたてているかもしれない、美しい夕陽が広がっているかもしれない。「もうひとつの時間」を感じることは、情報に追われている現代にこそ大切な時間なのかもしれない。



『桜の文化誌』

花と木の図書館

- 著者：コンスタンス・L・カーカー、
メアリー・ニューマン
- 訳者：富原まさ江
- 出版社：原書房
- ISBN：9784562059201
- 刊行年：2021.4

「鳥類学者だからって、鳥が好きだと思うなよ。/ 川上和人 / 新潮社」という本がある（良書です）。此度の依頼で、真っ先に浮かんだのがこちらの書名だった。春にちなんでいるからではない。「図書館員だからって、書評が書けると思うなよ」とはいえ、そんなことも言っていられないし聞いてももらえない。頼りになる仲間の知恵を借りて図書を選んだ。「桜の文化誌」である。昨年出版されたピチピチの新刊だ。植物としての桜だけではなく、ひろく、人の営みすべて（食・伝承・美術等々）と桜の関わり方を紹介している。世界中の桜を取り上げているが、著者は西洋の人である。巻末の付録が、著者と日本人との桜への思いのベクトルの違いを表しているのかもしれない。



『村上さんのところ』

新潮文庫

- 著者：村上 春樹
- 出版社：新潮社
- ISBN：9784101001708
- 刊行年：2018.5

書名である「村上さんのところ」とは、作家の村上春樹が読者の質問に答える期間限定のサイト（2015年5月13日公開終了）である。そこに集まった質問は3万7,465通、119日間で3,716問が回答された。その中の「名問答」473問をまとめた書籍版がこちらの本。恋愛・人間関係・仕事など日常生活の悩みから、小説の書き方、音楽、映画、猫やスワローズ（ファンクラブの名誉会員）といった村上春樹ならではのテーマも取り上げている。質問が多岐にわたるので自分と同じような悩みを探して回答を読むのもよし、質問を読みその回答を予想してみるのもよし（時に真摯に、時にゆるく答えている）。フジモトマサルのイラストが可愛く、内容と微妙に合っている。

大妻女子大学博物館

大妻女子大学博物館は、学院創立者の大妻コタカ・良馬夫妻や大妻学院に関する資料などを収集し、調査研究と展示公開を行っています。館内では、コタカが晩年を過ごした居室の移築復元をしています。また、博物館学芸員課程履修者を館園実習生として受け入れ、将来の学芸員の養成も行っています。博物館は、地域に根ざした生涯学習の場として、日々の調査研究の成果を情報発信しています。



学芸員 青木 俊郎



https://youtu.be/jMv4G_PQYc

1 大妻女子大学博物館の見どころ

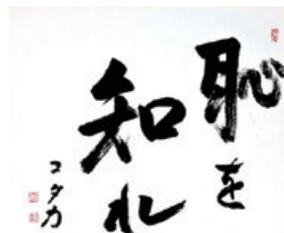
平成24年(2012)に開館した大妻女子大学博物館は、大妻学院に関する資料や、「日本人のくらしの知と美」に関する資料など、さまざまな資料を収集し、調査・研究・展示を行っています。加えて、大妻女子大学に在籍されている先生方の研究成果の発表の場ともなっています。

この動画では、大妻女子大学博物館が過去に行った展示を紹介します。また、主な収蔵資料、収蔵品データベース、そして大妻コタカが晩年を過ごした旧居室についても触れます。最後に、博物館へのアクセス方法について紹介します。

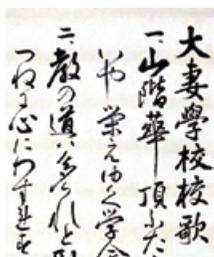
2 大妻学院校訓「恥を知れ」とは何か？

「恥を知れ」という言葉は、現在、他人に向かって非難の言葉として使われることが多い言葉です。しかし、大妻学院の校訓である「恥を知れ」は、他人に言う言葉ではなく、自分自身を顧みる言葉です。

この動画では、大妻良馬の経験から「恥を知れ」が校訓となった経緯や、「恥を知れ」という言葉に対する大妻コタカ・良馬夫妻の思い、学生が在学中に体験した校訓に関わるエピソード、そして大妻学院の近くに居住していた、東郷平八郎(明治・大正期の海軍軍人)が語った「恥を知れ」についても紹介します。



<https://youtu.be/IM-iSrAngFM>



<https://youtu.be/Eyo4R1I0sHs>

3 大妻学院校歌に見る千代田の風景

大妻学院は、大正6年(1917)に二度目の移転で麹町区上六番町(現在の千代田区三番町)へ移り、その後大きく発展していきました。

上六番町に移転した年に制定されたのが、校歌(旧校歌)です。この校歌は、大正12年(1923)9月以降に、歌詞の一部に修正が加えられます。そして戦後、あまり歌われなくなっていた旧校歌に代わり、昭和28年(1953)に新しい校歌が制定されました。

この動画では、新・旧校歌に織り込まれた文言、そして歌詞の中で修正された文言から、かつて存在していた千代田の風景を読み取ります。



生涯学習のご案内

一般財団法人大妻コタカ記念会では、高い文化や芸術性をもって人生をより豊かに送るために、生涯学習講習会を開講しています。文化、芸術、教養など、知的好奇心を高めるような多岐にわたる講座を設定しており、若い方から年配の方まで、生涯にわたって楽しく続けられます。

会員の方だけでなく一般の方でもご参加いただけます。4月中旬に受講者を募集しますのでご興味のある方はぜひホームページをご確認ください。

【かな書道・実用書道】



講師：
山口 玲子

かな書道では変体仮名、季節の歌を学び、実用書道では、自分の名前、祝儀袋など日常生活で使う実用漢字を中心に練習します。



<https://youtu.be/UdF52l0BrFE>

【花】



講師：
藪本 一翠

プリザーブドフラワー、生花を学びます。今回の動画では花を使った正月飾りに取り組みました。



<https://youtu.be/Qe00LrZMpmk>

【着付け】



講師：
深井 謙子

着物の着付け（名古屋帯、つゆ出し、二重太鼓）と浴衣の着付けを学びます。受講生の方にこの講座の魅力についてお話いただきました。



<https://youtu.be/LKF6Jd9ucsI>

【手芸(羊毛フェルト)】



講師：
福田 りお

ニードルを使って、スイーツシリーズを作っています。今回の動画では、羊毛フェルトを使った正月飾りに取り組みました。



<https://youtu.be/1QEigIMYb28>

【現代水墨画】



講師：
中馬 瑞水

自然界の草花を墨一色で表現していきます。梅や野菜なども表現対象で、筆と墨があれば誰でも始めることができます。



<https://youtu.be/CvHeFwpUb5Q>

このほかに「楽しい英語」の講座があります。



大妻嵐山高等学校 2年 飯森 涼夏



大妻嵐山高等学校 2年 本郷 紗羽



大妻嵐山高等学校 2年 塩谷 優月



早稲田大学 2年 馬場 紹末